

旅行記

四 國一周の旅 (上)

私の霊場巡拝記

本会委員 山田 桃太郎 (富江町柳野浦)

十一月二日 午前五時三十分柳野浦を出発ということ  
で、田中氏らと四人連れ、パールタフジーに同乗大手前  
に着いた。佐伯の史談会の人達は、もう大方集まってい  
た。待つ間もなく貸切りバスが来た。この席が、向こう  
四日間の自分たちめいめいの席であることと、皆さん思  
ったようである。

フエリー出港はちよつきり七時で、宿先着十時まで、  
船中におやかで着港が十分程遅れてはいたが、皆さん元  
気に上陸、愈々四國の土とふんだ。三日四日の一週旅行  
の始まりである。

先ず最初にお参りする札所は、御莊町の第四十番觀自  
在寺、御本尊は築師如來である。

心願や自在の香に花咲きて

浮世が札で住むやけたもの (御詠歌)

平城天皇の五輪塔のある觀自在寺には、大師が彫られた  
という南無阿彌陀仏の番号の板木が、寺堂として残され  
ている。空判と呼ばれるものがそれであるが、寺伝によ  
ると、大師がこの寺を建立した時、一本の大木で本尊の  
築師如來、脇侍の阿彌陀如來、十一面觀世音の三体を刻  
んだ。そして残りの木で作られたのが空判であるという。  
板木等に削ったものを、主婦が腹に巻いていると、安産  
の靈驗ありということである。

さて、バスは一路北に向って走る。次は松山に程近く  
の五十一番石手寺である。

ここは昨年お参りした所で二回目である。あまり遠く  
もない所に五十二番太山寺と、五十三番四明寺があるが、  
今回は時間の都合で参拝出来ない。

ここも御本尊は築師如來。

西方をよそとは見まじ安養の

寺に詣りて 愛くる十楽 (御詠歌)

十二番焼山寺、四十七番八坂寺について、この寺も衛  
門三郎に縁のある古刹で、来世は河野家の世継ぎにと焼  
山寺への山道で死んだ衛門三郎……。

何年かたって河野家に、世継ぎの長男が生まれた。左  
手に何が握っているが、聞かない。当時安養寺と呼ばれ  
ていたこの寺の住職に祈禱してもらうと、「衛門三郎再来  
と書いた小石を握っていた。以乘安養寺は石手寺と改称  
され、その石は今も寺の宝物館に納められているという。

石手寺に別れて車は気持ちよく進む。次は六十三番吉  
祥寺である。到着前から隣席の由平君が空を見て、「雨  
は変わった様だなあ」という。私も「うん、いやだなあ」と  
答えたが、間もなく小雨が降り出した。しかしたいした  
こともなく吉祥寺に着いた。

ここも御本尊は必ずらしい毘沙門天で、四國では左だ  
一体の仏様だという。

身のぬの悪しき非報をうちすてて  
みな吉祥き 望み祈れよ (御詠歌)

寺の境内鐘樓のかたわらに、まん中に丸く穴があいた  
石が置いてある。本堂の前から目を測じてこの石に向っ  
て進む、手にした金剛杖の先で穴を目がけて突く。見事  
的中すれば願いごとが叶う。名付けて成就石という。此

の石実日石鏡山系のある滝つぼにおったものだとか。またかなかお通路さんには人気があるそうだと。

さて、次は愈々宿泊地である第七十五番総本山善通寺である。御本尊は薬師如来。

我れすまばよもきえはてい善通寺  
深き誓言い法のともしび

ここはお大師さんの生まれ在所。善通寺の由来は仲々簡単に申されない。ここでは弘法大師が屏風が浦に誕生なされ、大師みずから建立した真言宗祭祥の根本道場である。そして父善通卿の名をとって善通寺と名づけられたという。

到着が少々遅れて、八時すぎでいた。小雨の降る中をお坊さんに案内されて宿坊にはいった。部屋割り等準備が出来てなかつたので、全員大広間にすむことになった。お風呂をもらって夕食をいただく。

次の朝、六時からお勤めがあるからとお坊さんはいわれていたの、全員本堂に集まり、和尚さんと一緒に般若心経を奉唱、その後で約三十分ほどお説教があった。和尚さんのお姿がまるで生きた仏様を拝むようであった。

善通寺を後にして、バスは満濃池に向かう。この池は溜池として且日本最古の築造になり、それを弘法大師が勅命をうけて修復を加え、現在では灌漑用溜池として全回第一の貯水量を誇っているそうである。

今日は二日目、十一月三日文化の日、バスは満濃池から金刀比羅宮参詣といく。石段の数は何百段だろう。かぞえても見ぬが、たいしたものであった。

次は栗林公園の見学である。日本でも屈指りの公園だが、今は栗の木はなく、みごとな松と池が及もので、栗

林公園でなく、松林公園と云った方が適切であろう。でも立派なものである。

それから第八十四番の札所、歴島寺に到着した。御本尊は千手観世音菩薩である。

歴島寺の寺に詣でつ  
祈りをかけて雪玉武夫 (御詠歌)

ここ歴島はその昔源平の古戦場で、色々な物語りがある。私はこの春大阪で一か月程遊んだ時、京都の歌舞伎座で「平家蟹」という出し物を見たが、古ようとそれがこの付近の海辺のことであつたかと、つくづく深い思いにふけた。芝居で見たその物語りの大略を書いてみよう。

壇の浦で平家が滅亡してから、早や二か月という時のことである。生き残つた平家の女官たちは、磯辺で海藻を拾って生計を立てたり、また若い女は春を売って暮らすなど、哀しい毎日を送っていた。

人けの途絶えた浜辺で、子供が蟹を糸でしばり戯れている地へ、一人の僧が現れ、蟹を見て恐ろしうに眉をひそめる。その蟹は、平家滅亡以来出てきたもので、甲羅は怨念をいたく武者の顔に似て、この辺りの人々は「平家蟹」と呼んでいた。

僧は子供達に腰につけた籠をよえ、蟹を放してやり海に向って回向するのだった。

この様子をじっと松陰から見ていた、もと官女の玉虫は僧を平家由縁の者と察し声をかけた。雨月と名乗るこの僧は、実は弥平兵衛宗清であった。

玉虫は仏門に入った宗清を殊勝のこととあざけり、ついで甥の景清の消息をたずねる。景清は頼朝を討つたため、

すでに鎌倉へ忍んだとこのこと、さすがは景清、自分も海に減んだ乎歌一門の恨みを晴らさずはおかぬと、執念もやす玉虫であつた。驕氣で執着深い玉虫の性質に、説得をあきらめた兩月は、後日の再会を約して、先帝の陵墓に参りるために立ち去つた。

貧しげな我が家へ帰つた玉虫は、妹の玉琴が身を売つてゐることを知り、しかもその相手がいつもきまつて源氏の侍、那須と五郎と分つて憤る。そして事情を明かし許しを乞う玉琴の頼みも聞き入れず、姉妹の縁を切つてしまふ。今は打ちしおれて泣く玉琴であつたが、与五郎の家来が迎えに来ると急に笑顔をとやもとし、使いの者について行つた。

酉の刻(夕方六時)の鐘が陰にこもつて聞こえてくると、あたりは急に妖気がただよひはじめ、玉虫の松扇に招かれ、ぞろぞろと平家蟹が這い出て来る。知盛・教経・教盛など、玉虫は次ぎ次ぎと壇の浦に沈んだ平家の公達の名を呼び、源氏への呪いを語りかける。

兩月が先帝の墓参をすませ、立ち戻つたのはちよつとそんな折だつた。俄かに風が吹いて灯火が消え、その不気味さで息とのおむ兩月であつたが、玉虫の心情を哀れにたまはれましくも思ふのだった。

やがて与五郎が玉琴を伴つて現われ、関東へ下向するにあり、玉琴を妻にしたいと玉虫の許しを求め、玉虫は勝手に行かぬといふとけんもほろろに言ひ出す。しかし与五郎と玉琴の誠をこめた訴えに、心を動かされた玉虫は、自ら媒酌人をつとめようと言ひ出す。

二人は喜んで祭壇の神酒を盃に受けるが、玉虫は祝言にひとさし舞おうと扇をかざして舞い始める。静々と舞もしいに急調になり、凄みを増してくる。足拍子も強く二人に詰めよる玉虫、与五郎も玉琴も縛られたよ

うに動けなくなる。神酒というのには実は源氏調伏の毒酒であつた。ついに苦しみのうちに息絶えんとする二人は、玉虫はすゆる屋島の合戦で味方の舟に揚げ左扇の船を射て見よと源氏方子松扇で招いたが、与五郎の兄那須と一に見事に扇を射落され、平家敗北の前兆を作つた執念を述べ、敵の家来地獄へ送つてやるのだと、物凄く笑みを浮かべるのだった。

木陰から一部始終を見届けた兩月が、わが力で救ひ難しと立ち去つたのち、玉虫は再び現われた平家蟹に尊かれ、海底の都へと沈んで行く――。

この「平家蟹」の物語が、古まうどの近所の海辺のことだと考えて、感慨深く思つた。(以下次号)

以上は旅行記の前半、本年三月第二次旅行即ち出かける。それまでにもう一号を二月中に発行するので、その第二七号にこの後半を掲載いたします。おゆると――。(編集者)

史談会二十周年記念特別企画

四国霊場巡拝・史跡めぐり(一周旅行)  
第二次参加者の募集・決定について  
期日 昭和五十四年三月十八日(日曜)出版  
十九・二十日とめぐり、二十一日(春分の日)帰着

三泊四日(蒲田善通寺・靈山寺・高知市ホテル)  
コース 今秋のコースによるが、少々変更もある。

経費 バス借上料・宿舎費の値上げで約三分四の見込  
申込 今秋すでに五十数名の申込を受け付けているが、参加出来な  
い方もあるので再募集する。ただし既に申込されて  
いる方を優先する。(新年になつてたしかめる)  
新規の申込も――受付中(羽柴坂)